

一印象であった。ただ、それも自由な校風が生み出す一面である。校則はあるもののその校則も学生自身が話し合っていて決めるのだ。当然衝突もあるが、そんなときは寮単位の会合でとことん議論をし、お互いの意見をぶつけ合う。語学力の乏しい人にも面倒見のよい先輩がサポートしてくれ代弁してくれることもあった。このような寮生活のなかで、強い絆が生まれ信頼関係が培われた。

寮生活も個性的なら、教わる授業もまた型にはまったものではなかった。物理の授業では、学ぶことだけでなく疑問に感じたことをディスカッションし合うことが重要視された。その話は相対性理論の解釈にまで及び、授業が終わった後に教室の外で議論が続けられることも珍しくなかった。そのようにして、「科学には常に答えはない」ということもおのずと理解をした。詰め込み式学習に慣れていた自分にとって、いささか戸惑いもあった。それも、すべてを網羅することが教育ではなく、勉強する興味を湧かせてきっかけを植え付けることが教育であるという理念からきている。実際、興味が湧いて授業では取り上げられなかったことまで自分で勉強するようになった。授業は午前中までで、午後は週三回の奉仕活動が義務付けられている。さまざまな活動

🌈さまざまな経験を通じて

のなかから自分で選んだ奉仕活動を二年間通して行う。老人介護、知的障害の子どもと一緒に遊ぶ活動、環境汚染を研究する活動や三つの救助隊(浜辺、船舶、海岸)などがある。私の選んだ海岸救助隊は、実際の救助活動も行って地域のレスキュー隊と連携をとりながら活動をした。海岸線沿いには崖が続き、誤って転落した人を救助することも少なからずあった。救助当番のときは、たとえ夜でもサイレンとともにレスキュー小屋に集合し、救助スーツを着てジープで出動する。それ以外にもさまざまな経験を学校は用意してくれる。土日にはプロの劇団による劇や、在校生のコンサートやアートの催し物などが企画された。

多種多様な人々のなかでの共同生活では、



学友と寮の前で

議論が大きなウエイトを占めている。「おまえは何を感じ、どう考えるのか」「そしてどう行動するのか」が常に問われ、必然的に自分を見つめる機会が多くなる。自分でも気がつかないうちに、自分のアイデンティティーである日本を強く意識することにもつながった。育った環境、宗教、肌の色や考え方の違いだけを見ていては偏見が生まれやすい。しかし、このようなさまざまな経験を通じて価値観を共有し、友情を育むことで一人の人間としてお互いを尊重し合うことができるようになった。

最近の医療現場では専門性が確立し、昔のように患者全体を診ることが困難になりつつある。また医師には患者に対して「治療する」というある意味、上から目線がどうしても存在する。治療中ならばそのパターンリズムも大切だが、終末期医療では一つの見方だけでなく、さまざまな価値観を持った人間として受け入れる必要がある。このような状況でも自分が受け入れることができているかは不明だが、UWCで多くの体験をして多くの引き出しをもらった分だけ患者に還元していきたいと心がけている。

留学で学んだこと

国立循環器病研究センター心臓血管内科医師

天木 誠

あまき

まこと

一九八九―一九九一年、UWCアトランティックカレッジ(英国)留学。東京慈恵会医科大学医学部卒業。亀田総合病院初期レジデント、国立循環器病研究センター心臓血管内科後期レジデントを経て現所属。

循環器内科医として勤務する立場上、日頃からさまざまな患者と接する機会が多い。治療が奏効する人が多いなか、現在の最先端の医療でも治療の施しのない重症の心臓病を患う人も少なくない。医療者には、病氣のみでなくその人の考え方、生き方を受け入れることが求められている。医療の現場で働

てみると、つくづく高校時代に体験したさまざまな経験が医師としての自分の糧となっていることを感じる。

期待と不安を胸に

ユナイテッドワールドカレッジ(以下UWC)の理念は、十六歳から十八歳という人生のなかでもっとも多感な時期に、人種、宗教、経済力などにかかわらず志ある若者が集い、教育や社会活動を通じて国際理解を深めることにある。選考は学力のみならず、ディスカッションや面接試験などを経て世界中から選ばれた若者がさまざまな経験を積む。受験勉強のみが重視され、目標のないままひたすら詰め込む勉強に疑問を感じていた自分にとって、これほど魅力を感じた学校はなかった。十六歳の夏、期待と不安を胸に英国へと旅

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四五三名の卒業生を輩出している。

立った。ロンドンの空港からバスに揺られること四時間、石の壁で囲まれた牧場が延々と続く景色を見ながらようやく到着した。疲労と高揚感のなか見回すと、眼下には夕やけに照らされた穏やかな海が広がり、右手にはブルistol海峡に臨む十四世紀の古城が立っていた。この自然と歴史が融合した場所がUWCアトランティック校であった。

寮生活で生まれた絆

生活は全寮制で、できる限り人種の偏りのない四人で一つの部屋を共有する。言葉はもちろんのこと、考え方、宗教、育った環境などのすべてが違う四人を一緒に住ませるのだから大変だ。あるインド人のいる部屋はヒンズー教の神様の絵や銅像が所狭しと並べられ、そのうえお香がたかかっていた。他の部屋の米国人は大音量のヘビーメタル音楽を聴きながらベッドでジャンプしているし、とんでもないところに来てしまったなというのが第

